

commons: schola 電子音楽 Electronic Music

一つの正統性が
浮かび上がってくる過程

文／鈴木淳史



座談会のメンバー（左から、川崎弘二、三輪眞弘、坂本龍一、小沼純一）

全30巻が予定されている坂本龍一総合監修『commons: schola』の第13巻は『電子音楽』。バッハから踏み出された、CDとブックレットによる新しい“音楽の百科事典”を目指すシリーズも、いよいよディープな部分に分け入ってきた。

ブックレットの座談会が面白い。参加しているのは監修の坂本龍一に加え、ポダレス上をひらひらと舞う音楽評論家小沼純一、ユニークなコンセプトを实践する作曲家三輪眞弘、その道の権威であり、『日本の電子音楽』なる電話帳を思わせる分厚い書籍を上梓した川崎弘二。彼らの話は、“電子音楽とは何か”というテーマを軸に進められていく。

たとえば、小沼が提議する「バルトークの民謡録音」や「ヒトラーの演説」、あるいは、坂本の『「アダージョ・カラヤン」のように、録音され編集されたもの』も電子音楽に含まれるのではないか、といったように。つまり、音楽という枠を音響に拡大して、メディアが介在するものというのを広い意味での電子音楽と見なし、そこに従来の西欧音楽からの脱却を見る議論といえる。短波ラジオから聞こえてくる混線し変調する響きが音楽を聴取することの根源の一つであったわたしにとって（坂本や三輪もそうだったらいい!）、猛烈に親しみ

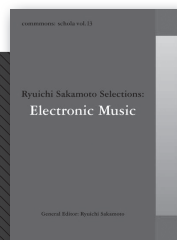
深い話だ。

これだけフトコロの広い議論をしながらも、最終的なリストにはオーセンティックな作品が並んでいる。シュトックハウゼンから始まり、ブーレーズ、フェラーリ、湯浅譲二など、まさしく“電子音楽の教科書”といえる模範的なラインナップになっているのがなかなか興味深いではないか。

もちろん、変化球も用意されている。パフォーマンス性の側面が強調されがちなケージの「カートリッジ・ミュージック」では、この作品の不確定性は電子機器を通すことで生まれたと指摘。あるいは、機械を用いた繰り返し、そしてそこから生まれるズレが、ライヒのミニマル音楽の出発点ともなった初期作品「イツ・ゴナ・レイン」など。また、音の選択をコンピュータが担うアルゴリズムの作曲家、バルロの作品が収録されているのも、じつに気が利いている。

一癖も二癖もある論者を揃えながら、彼らが角突き合わせることで、一つの正統性が浮かび上がってくる過程がこの座談会で描かれる。「AKBだってメルツバウだって」（坂本）、「電子・電気的な技術を何らかの形で援用して作ったものはすべて“電子音楽”だと言ってしまう」（川崎）ながらも、その根源をとっくりと探っていったと

き、どんな音楽がそこにはあるのかが示されているというわけである。こういった過程を丁寧に見せることに、このscholaという企画の深みが隠されているような気がする。



CD+ブックレット
(120ページ/ハードカバー
/DVDトールサイズ)
(commons-RZCM-45973)

問: commons
<http://commons.com/>

commons: schola vol.13
Ryuichi Sakamoto Selections:
Electronic Music

CD収録曲

- ①カールハイツ・シュトックハウゼン: 習作 II
- ②ピエール・ブーレーズ: エチュード I
- ③リュック・フェラーリ: 偶発音のエチュード
- ④ヤニス・クセナキス: アナログック A + B ~ 9 弦楽器とテープのための
ヨハネス・カリツケ指揮アンサンブル・レゾナンス
- ⑤ジョン・ケージ: カートリッジ・ミュージック
ジョン・ケージ、デイヴィッド・テュードア (パフォーマンス)
- ⑥ステューヴ・ライヒ: イツ・ゴナ・レイン パート I
- ⑦湯浅譲二: ホワイト・ノイズによる「アイコン」
- ⑧ルイジ・ノーノ: ピエールに。青い沈黙、不穏 ~ パス・フルート、コントラバス・クラリネットとライブ・エレクトロニクスのための
ロベルト・ファブリチアーニ (fl) エルネスト・モリナーリ (cl)
- ⑨クラレンス・バルロ: ナイルの1月 ~ エレクトロニック・リアリゼーション版